

# 第一回総選挙前の名望家団体

——「大阪月曜会」に関する新出史料と若干の考察——

原 田 敬 一

はじめに

一九七三年の地方史研究協議会研究大会で、北崎豊二氏が

大阪地方における自由民権運動については、明治一〇年代はもちろん、二〇年代に入ってからの大同団結運動についても殆んど従来明らかにされてこなかった。

と総括したが、その後の二〇年間に研究は相当進んだ。自由民権運動百年全国実行委員会編『自由民権運動研究文献目録』（三省堂、一九八四年）の「大阪」（竹田芳則氏執筆）は、一一七編の業績を列記している。目録編纂以後一五年間の研究蓄積も含め、全体の動向をまとめると、大きく三つの流れを確認することができる。

第一は、自由民権運動そのものの、またはその底流となった運動や事件の解明である。代表的なものは、北崎豊二氏の地価修正運動、大阪自由党研究、原田久美子氏・竹田芳則氏の立憲政党研究、服部敬氏の淀川改修運動、中瀬寿一氏の民衆運動研究など。

第二は、それらを取り巻く条件としての、新聞や雑誌などの書誌的人物的究明である。同じく後藤孝夫氏の『朝日新聞』・『東雲新聞』などの研究、白石正明氏の『東雲新聞』研究。両氏にはそれぞれ中江兆民研究がある。

第三は、さらに周囲の条件として、府会・市町村会・区会・民会などの北崎豊二氏による分析である。

これらの研究によって、自由民権運動だけでなく、都市史や部落史など違うステージを解き明かすことも進展を見せた。

ここでは、それらの進展を受けて、大同団結運動期の大阪の政治状況を、月曜会という団体を中心として考察したい。直接関わる先行研究は、三つある。

【Ⅰ】猪飼隆明「第一回帝国議会選挙と人民の闘争」（『史林』第五七巻第一号、一九七四年一月）。

【Ⅱ】後藤孝夫「東雲新聞略史」（『復刻東雲新聞』別巻所収、部落解放研究所、一九七七年三月）。

【Ⅲ】北崎豊二「大同団結運動と大阪の倶楽部——月曜会と大阪苦楽府を中心に」

（同氏『近代大阪と部落問題』所収、解放出版社、一九九七年四月）。

【Ⅳ】白石正明「中江兆民と『東雲』時代」（『部落解放研究』第二号、一九七八年二月）。

【Ⅳ】は、東雲新聞が焦点だから、それに近い大阪苦楽府に詳しく、月曜会は大阪苦楽府との関わりで言及されるにとどまる。筆者も、次のような対応をしている。

①「都市支配の構造——地域秩序の担い手たち」（『歴史評論』第三九三号、一九八三年一月。後、拙著『日本近代都市史研究』に所収、思文閣出版、一九九七年一一月）

②「『三大事件建白運動』と大阪民党」（梅溪昇教授退官記念論文集『日本近代の成立と展開』所収、一九八四年四月。同じく前掲拙著に所収）

③「第一回総選挙後の政治情勢——月曜会と大阪苦楽府を中心に」（『鷹陵史学』第二四号、一九九八年九月）

本稿は、これらの研究史を整理し、大阪における政治運動の過程をまとめるとともに、本稿末に掲げた新史料

(Ⅰ・Ⅱ)により新しい事実を加えようとするものである。

## 一 第一回総選挙前の政治情勢——大阪における

はじめに、で述べたような成果をふまえて、大阪の政治情勢についてまとめてみよう(以下、前掲【Ⅰ】の各論文からの引用を、北崎二五〇頁、のように記す)。

市制町村制や府県制など近代的な地方制度が実施される一八八〇年代末、名望家による地域支配が実現する。地域支配に関わる多くの役職が、職業ではなく、「名誉職」として設けられ、立候補制度のない選挙制による選出という制度であつたことによつて、名望家による集団形成が必要になつた。特に都市部では、おおむね選挙区を範囲とする集団が、多数現れた。大阪府では、一八八七(明治二〇)年一二月の大阪府会第六回選挙の際、進取会(東区)と淳正会(南区)が初めて現れた名望家団体である。翌年三月、西区の府會議員補欠選挙では、名望家団体による推薦広告が、新聞に掲載されるようになる(拙著一二三—一四頁)。

一八八七年一二月を始原とする大阪の名望家団体の歴史は、ほとんど不明である。名望家団体は、法制上のものではなく、選挙の円滑な実施のための必要条件にとどまつたという事情からである。北崎豊二氏は、新聞を博捜して、南倶楽部・南船場倶楽部・西倶楽部・北倶楽部・東倶楽部・堺倶楽部・偕進会・奨成倶楽部・北泉倶楽部・成住倶楽部・西成倶楽部・(河内)有志協議会・枚方倶楽部・河内共益会など多数の名望家団体の規約や組織、経緯などを発掘している(北崎二五一—二六二頁)。猪飼隆明氏も、両嶋倶楽部の規約や組織経過などを示している(猪飼九七—九九頁)。

これらの名望家団体続出は、一八八七年の大阪府会選挙の成功によるもの(北崎二四五頁)だが、『朝日新聞』

表1 倶楽部設立年代（設立順）

南倶楽部	1888. 2. 19
西倶楽部	1888. 4. 8
(河内)有志協議会	1889. 1. 5
北倶楽部	1889. 3. 5
成住倶楽部	1889. 3. 5
堺倶楽部	1889. 3. 25
北泉倶楽部	1889. 4. 21
東倶楽部	1889. 5. 3
枚方倶楽部	1889. 5. 10
偕進会	1889. 6. 一
奨成倶楽部	1889. 7. 20
河内共益会	1889. 7. 一
両嶋倶楽部	1889. 11. 28
南船場倶楽部	不明
西成倶楽部	不明

の社説や寄書も大きな影響を与えたと言われる（同二四六頁）。また大阪市部の倶楽部は別として、郡部には、東成郡と住吉郡の成住倶楽部のように、「いずれも地域の名望家であり、地価修正運動にもかかわっていた」多くの人々が役員として設立されているものがあり（北崎二六〇頁）、植場平ら旧自由党员が規約起草にあたる、両嶋倶楽部もあった（猪飼九八頁）。

表1は、北崎、猪飼両氏があげた倶楽部一五を、設立年代順に整理したものである。これによれば、二つのみが一八八八年に設立され、残りは一八八九年に結成された（不明は二）。一八八八年三月には西区の府会議員補欠選挙、一八八九年一月に第七回大阪府会選挙（半数改選）、六月に第一回大阪市会選挙が行われている（拙著一一四頁）。ほぼこれらの選挙に対応している。それぞれの選挙を視野において、有権者たる名望家の結集が図られたのだろう。

自由党系の再結集をめぐる動向との関連では、北浜倶楽部が焦点である。北浜倶楽部は、大同団結運動への対処をめぐって対立が生じ、改進黨系は脱退し、別個に大阪協和会を、一八八八年一〇月下旬結成した。北浜倶楽部残留組は、一八八九年の三月末から四月頃には、河野広中らの大同倶楽部に結集を決めた（拙稿一九九九、一三九頁）。その結果、北浜倶楽部残留組のメンバーは、四月一二日月曜会を結成した（北崎二六五頁、後藤七一頁、猪飼九六頁、拙稿一三九頁）。残留組は、一八八八年一〇月の協議で「中立党組織」と報じられており（北崎二六三頁）、独立党あるいは中立党と呼ばれていた（後藤七一頁、北崎二六三頁）。従って、月曜会は、彼らの名称変更と理解されている（北崎二六五頁）。

月曜会の機関紙として、『関西日報』が、同年七月一三日に創刊された（猪飼九〇〜九一頁、後藤七三頁）。

月曜会は、大同倶楽部に参加し、有力団体の一つとなった（北崎二七三頁、後藤七一頁）。

月曜会結成の二日後の四月一四日、それに対抗する形で、大阪苦楽府が『東雲新聞』を中心に、「土佐人多数にして、壮士大概之に属す」（指原安三編『明治政史』下篇、八〇頁。『明治文化全集』正史篇、下巻。北崎二六六頁）準備会が作られ、四月二六日正式に結成された（原田一九九九、一四二頁）。大阪苦楽府も、大同倶楽部に参加したが、一八八九年二月二〇日脱退を通告した（北崎二七三頁）。その前日、一九日大阪苦楽府のメンバーは、関西自由党を結成し、事務所を大阪苦楽府に置いた（白石四三頁）。関西自由党は、愛国公党の下部組織の意味を持っていた（同）。

月曜会と大阪苦楽府、『東雲新聞』は、同じ大同倶楽部に属しているとはいえ、対立していたが、大隈重信の条約改正案には反対の歩調をそろえ、一八八九年一月一日協同して、大阪産湯楼での「非条約改正派全国有志連合大懇親会」を準備した（猪飼一〇〇頁）。

総選挙を前にして、旧自由党系の再結集計画は、難航していた。

まず、一八八九年五月、結成すべき組織が政党であるか否かで論争し、政社結成を求める、いわゆる政社派の大同倶楽部と、ゆるやかな連合にとどめるべきだとする、いわゆる非政社派の大同協和会に分裂した（北崎二七三頁）。大同倶楽部は、一八八九年二月二〇日の大会で、自らを「政党」とする規約改正を行っている（北崎二七六〜二七七頁）。

大同倶楽部と大同協和会は対立していたが、一八八九年八月末に、条約改正反対の大演説会を、保守中正派・玄洋社・紫溟会などともに、共同して開いている（原田一九九九、一四二頁）。

次の動きは、一八八九年二月一九日、板垣退助の動きから始まる。板垣は、一二月の大阪での懇親会で愛国公

党組織化を明らかにし、一八九〇年五月結党する。大同倶楽部と大同協和会は、いずれもそれに参加せず、独自の路線を歩む。大同倶楽部は、前述したように一二月二〇日の規約改正で、政党と規定した。大同協和会は、一八九〇年一月二一日解散し、自由党を結成した。

第三段階は、一八九〇年五月の板垣の呼びかけである。板垣は、愛国公党・自由党・大同倶楽部の三派合同を求めたのである。五月一四日、三派の代表者会議は、三派合同を決議し、一五日庚寅倶楽部を組織したが、正式な政党組織化は総選挙後とされた。総選挙で各派の力を確定してから、政党の配置も決めようということだろう（原田一九九六、一四二―一四三頁）。

大阪では、月曜会が大同倶楽部の有力団体として維持された。大阪苦楽府が結成した関西自由党は、愛国公党に加わった。改進黨系の大阪協和会は、独自に動いていた。

こうした陣立てで、大阪でも第一回総選挙をむかえることになった。

## 二 月曜会についての論点と若干の解明

ここに紹介する史料Ⅰ・Ⅱは、市史編纂のために豊中市に寄託された「奥野家文書」中より、一九九六年九月の整理中に発見されたものである。奥野熊一郎は、桜塚村の地主であり、屈指の名望家として豊中村の村長など名誉職を歴任している。

月曜会に関する一次史料が目の目を見るのは、これが初めてではない。【Ⅲ】北崎豊二「大同団結運動と大阪の倶楽部——月曜会と大阪苦楽府を中心に」（同氏『近代大阪と部落問題』所収、解放出版社）が、「月曜会規則・月曜会会友々姓名表」の原文掲載をしたのが、最初である。従って、史料Ⅰ「月曜会規則」は、内容的には北崎論文

の二九一―二九二頁に掲載されたものと同じであるが、形態は異なり、規則だけの冊子になっている。史料Ⅱは新史料であり、かつ史料Ⅰと同時に発見されたため、結成一年後の一八九〇年も、結成当時の規則に従っていたから、新たに印刷されたものと考えられる史料である。

「月曜会規則」が制定されたのは、一八八九（明治二二）年六月四日であるが（北崎二九一頁、史料Ⅰ）、翌年五月までに「大阪」を付して「大阪月曜会」と改称している（史料Ⅱ）。わざわざ「大阪」を名乗ったのは、大同団結運動が政党化で進展し、地域の名望家団体としての性格をより明確にしようという意思の表れかもしれない。

史料Ⅰには、「本会ハ事務所ヲ大阪市東区

第 番邸ニ設置ス」とあったが、北崎氏の提示された史料

では、「西成郡曾根崎村二千八百六」が墨書されているため、そこが事務所と考えられる（北崎二七一頁）

次にメンバーについて考察しよう。北崎論文に、史料として掲載されている「月曜会々友姓名表」は二つある。それについて、北崎氏は次のように解説されている（二七二頁）。

いずれも「明治廿二年六月調査」となっているが、前者はすべて印刷されている。しかし、後者は、印刷された前者の「月曜会々友姓名表」に府会議員や市会議員などの肩書が書き加えられているほか、関西日報社の末広重恭ら二六人を墨書しているのである。それゆえ、後者の「月曜会々友姓名表」も「六月調査」となっているが、『関西日報』の創刊が一八八九（明治二二）年七月一三日であることなどからみて、同年七月以降に作成されたものと思われる。そして、追加された会友二六人のうち、七人は関西日報社のものであり、一五人は豊島郡あるいは能勢郡在住のものであるが、その多くは森秀次が住む古江村の近くにある池田町あるいは池田西本町のものであった。森秀次の府会議員選挙の選挙区は豊島郡であったから、彼らが月曜会の会友になったのは、森の働きかけによるのかも知れない。

北崎氏の示した二つの「月曜会々友姓名表」のうち、印刷のみによるもの（「明治廿二年六月調査」）をA、印刷

に墨書の書き加え（「同年七月以降に作成されたもの」をBとし、ここに掲げた「大阪月曜会」の「明治二十三年五月調査現員」と比較する（便宜上新出史料をCとする）。すなわち、三つの関連は次のようになる。

A 明治二十二年六月調査 総員 七六

B 明治二十二年七月以降 総員 一〇二

C 明治二十三年五月調査 総員 二七一

月曜会構成員については、一八八九年四月の結成時、『東雲新聞』が三〇名の名前を掲載した（四月二八日と三〇日の記事）。うち二七人は名簿Aと重なっており（原田一九九九、一四〇～一四二頁）、最初のメンバーと考えてよいだろう。三〇人のうち、一五人は代言人である。『東雲新聞』は、「代言人党」と呼んだ。

二ヶ月後名簿Aが作成された頃には、七六名の会員を獲得している。このうち一七人は代言人で、四一人は府会議員である。府会議員七一人のうち六〇％を擁していたわけである（北崎二七一頁）。『大阪毎日新聞』六月一三日の記事により、「月曜会の会友名簿が作成される少しまえに、郡部選出の府会議員が多数同会に加入したのかもしれない」（北崎二七一頁）。「主な会員は、菊池のほか山下重威・森作太郎・東尾平太郎・横田虎彦といったところで、府会の有力者をふくむ代言人が多かった（大阪朝日四月一四日）。菊池・森・東尾らは、かつての日本立憲政党员である」（後藤七一頁）と、立憲政党とのつながりも指摘される。

名簿Bの作成時期は不明で、北崎氏は「一八八九年七月以降に作成されたもの」と推定された。名簿Bで増えた二六人のうち七人は、関西日報のものである（北崎 二九六頁）。

〈記者〉末広重恭・森本駿・村松恒三郎

〈画工〉田口年信

〈彫刻業〉宮田銀二郎・渡辺賢・津川音五郎



『関西日報』創刊時にいた六名の記者のうち、七月二三日に矢部善作、一二月初めに浅野乾と蒲生敏郎が退社しているから、名簿Bに三人の名前が見あたらないことで、その作成時点を一八八九年一二月末から一八九〇年四月までの間と考えることができる。

二人の新会友は、結成以来半年以上かかって獲得されたものだが、その後急速に会友拡大が進み、一年後には名簿Aの四倍に近い、二七一人の大きな団体となったことが、名簿Cによつてわかる。また、大阪協和会を結成した中心人物である大三輪長兵衛・砂川雄峻・前川楨造らの名前は、あいかわらず見あたらず、彼らとは別個の組織として維持されていたのである。

異動を明らかにするため、原文をそのまま翻刻したCの下に、AとBにも掲載されている人物について○を施し、住所等の違いを注に記した。成立の経過からして、名簿Aに二人付加したものが名簿Bである。名簿Cは、全く別の印刷物であるため、人名の異動がある。名簿Aにありながら名簿Cに不掲載の者は、以下の一〇名（イロハ順）。

和泉国南郡八木村大字大町	農	井阪 光暉
大阪市東区今橋三丁目	会社員	箸尾寅之助
大阪市東区淡路町四丁目	古物商	春海吉之助
和泉国日根郡多奈川村大字谷川	農	戸口亀太郎
河内国八上郡八下村大字野遠	農	織田 信次
大阪市東区今橋二丁目	代言人	河村 訥
大阪市北区堂島中町二丁目	代言人	太宰 友輔
和泉国日根郡新家村大字新家	農	山田新五郎

表2 会友拡大状況

合 計		名簿A 7 6	名簿B 1 0 2	名簿C 2 7 1
西 区		7	+ 9 (16)	2 4
東 区		1 9	+ 1 (20)	2 6
北 区		9		1 5
南 区		1		1 1
(摂津国)				
西成郡		3		9
東成郡		0		2
住吉郡		1		0
島上郡		0		7
島下郡		2		3
豊島郡		2	+ 1 4 (16)	6 6
能勢郡		0	+ 1 (1)	3 6
(河内国)				
茨田郡		1		7
交野郡		1		3
讃良郡		1		4
河内郡		1		2
若江郡		2		7
高安郡		0		0
石川郡		1		4
八上郡		1		0
古市郡		1		1
安宿郡		0		0
錦部郡		1		1
丹南郡		1		1
志紀郡		1		7
丹北郡		1		1
大縣郡		1		2
渋川郡		1		3
(和泉国)				
堺市		2		7
大鳥郡		3	+ 1 (4)	7
大泉郡		2		2
日根郡		5		9
南郡		3		2
その他		1		2

(注1) 住所が移っている者の調整はしていない。名簿Bは、増加数のみ記した。

(注2) 巻末に別記されていた五人は、印刷の過程で付加した者と推定し、各都市に加えた。

(注3) 名簿Aの一人と名簿Cの客員の二人は、兵庫県であり、「その他」に入れ、合計に加えた。

摂津国住吉郡喜連村  
和泉国日根郡上ノ郷村  
農 佐々木政行  
農 南源 十郎

名簿Bの墨書追加分のうち、名簿Cにないのは、次の一名のみ。

大阪市東区高麗橋二丁目 代言人 田中稲人

これらの人名が削除されている事情は不明である。今後の調査を待ちたい。

表2によると、区郡の中で、豊島郡が断然多い。隣の能勢郡とあわせると、一〇〇名を超える。北崎氏が、名簿Bの豊島郡の増加理由を「森の働きかけ」と推定したことを、考慮に入れる必要がある。一八八九年二月に行われ

た大阪府会議員の増選選挙で当選した金丸鉄の得票数は、四八二だった（『大阪府会史』第一巻、八三頁、一九〇〇年）。

地域の広がりでも、ほとんどの区郡を含んでおり、全府的組織として成長を続けていたことが明らかである。数が少なくても、その地域のもっとも有力な名望家を獲得していると思われる。錦部郡は、名簿AもCも一人だが、酒造家で地主という郡内屈指の名望資産家の西條與三郎である。

区と郡の関わりでは、名簿Aで区36（47%）に郡40（53%）と拮抗していたが、名簿Cでは区76（28%）に郡195（72%）となり、郡部の増加率が極めて高い。したがって、職業は「農」が大多数である。

名簿A、Cともに府会議員四名で同じだが、Cでは大阪市会議員六人、堺市会議員二人、堺市参事会員一人、村長一人、村助役六人、村会議員一人など名誉職就任者が多い。名簿Aについての「会友は府会議員や代言人のほか、府下の各地域における名望家たちであった。」（北崎二七二頁）は、一年後も同じであった。代言人も七人を数えるが、全体の六%であり、もはや『東雲新聞』が揶揄したような「代言人党」ではなかった。

### むすびにかえて

月曜会は、改進黨系が大阪協和会として分離し、大阪苦業府とも対立していたため、大同倶楽部に結集し、その傘下にあるという明確な政治路線を持っていたが、その後曖昧になったと思われる。一八八八年から一八九〇年の組織過程を見ると、大阪府全体を網羅する地域名望資産家の結集体としてしだいに確立している。

少なくとも大阪府下では、政党と地域名望資産家団体とは両立しない。一八九〇年の時点で、月曜会は、名望家団体としての性格が主で、政党との関係は従になって、理解されていただろう。「政治上の意見の異なるさまざま

な人を月曜会の会友とした」（北崎二八二頁）のは、一八九〇年に入ってからではないだろうか。

事例の一つは、月曜会系候補の乱立である。一八九〇年七月の第一回総選挙に、大阪府第五選挙区で当選した菊池侃二は、結成以来の月曜会会友であるが、そこで争った豊島郡南豊島村の村長小畑万次郎や府会議員の織了意は、いずれも新聞では「無所属」とされているが、名簿Cにより会友であることが確認できる。八人の候補者（猪飼八〇頁）のうち、三名が月曜会だった。この選挙区の島下郡には、西尾與右衛門（吹田村）と中野広太郎（新田村）という月曜会に属する二人の有力な府会議員がおり、彼らの動向も検討して、月曜会の選挙方針を再検討しなければならぬ。

事例の二つめは、「月曜会の人気を利用し、月曜会員として総選挙にのぞみ、当選すると佐々木政父のように政府派に転じた（大成会に加盟）者もいた」（北崎二八二頁）一件である。

これら二つの事例は、月曜会が名望家団体として機能していたことを示していると思われる。にもかかわらず、月曜会は、総選挙後の七月二三日、政社化を決議した（原田一九九、一四六頁）。その時点での会友数は「三百二十余名」と報じられている（同）。月曜会をそのまま政社とする案は実現されず、九月七日解散総会を行った（同一四八頁）。解散から、一八九一年三月の大阪自由苦楽府の結成までは、拙稿③を参照してほしい。それ以後は、未解決の課題として残っている。

# 史料一 「月曜会規則」（本文六頁と表紙、裏表紙）

（表紙） 月曜会規則／明治廿二年六月四日制定

## 第一章 総則

第一条 本会ハ月曜会ト称ス

第二条 本会ハ事務所ヲ大阪市東区 第 番邸ニ設置ス

第三条 本会ハ同志相会シ政治法律經濟等ノ學術ヲ研究スルヲ以テ目的トス

## 第二章 会友及入退会

第四条 品行方正ニシテ大阪府管内在籍若クハ寄留ノモノハ何人ヲ論ゼズ会友タルコトヲ得

但時宜ニヨリ他管内ノモノ、入会ヲ許スコトアルベシ

第五条 会友タラント欲スルモノハ会友二名以上ノ紹介ヲ得テ本会ヘ申出ツルモノトシ其許否ハ常集会ノ評議ヲ以テ之ヲ決スベシ

第六条 会友事故アリテ退会セントスルトキハ其旨ヲ記シ本会ヘ届出ツルモノトス

第七条 会友中不良ノ行為アルトキハ常集会ノ評決ヲ以テ退会セシムルコトアルベシ

## 第三章 職員

第八条 本会ハ左ノ職員ヲ置ク

一 幹事 三名／一 常議員 十名／一 書記 若干名

第九条 幹事ハ本会一切ノ事務ヲ処弁シ常議員ハ本会緊要ノ事務ニ参与シ書記ハ庶務會計等ノ雑務ニ従事スルモノトス

第十条 幹事常議員ハ總集会ニ於テ公撰シ其在職期限ハ六ヶ月トシ満期ノ時再撰スルコトヲ得、書記ハ幹事之ヲ撰任シ相当ノ報酬金ヲ与フルコトアルベシ

第十一条 幹事ハ常議員ノ評決ヲ經テ会務ノ細則ヲ設ケ之ヲ施行シ又總集会ニ於テ前六ヶ月間庶務會計等ノ要領ヲ報告スベシ

## 第四章 集会

第十二条 集会ヲ分テ左ノ二種トス

一 總集会／一 常集会

第十三条 總集会ハ毎年二回五月十一月二之ヲ開キ前六ヶ月間ノ庶務會計等ノ報告ヲ勘査シ後期ノ職員ヲ撰挙シ其他緊要ナル事項ヲ評決スルモノトス

但臨時總集会ヲ開クコトアルベシ

第十四条 常集会ハ毎週一回即月曜日ニ之ヲ開キ第三条ニ記シタル目的ニ随ヒ講談演說等ヲナスモノトス

## 第五章

第十五条 会友ハ会費トシテ大阪市内ノモノハ毎月金拾錢大阪市内外ノモノハ每期ハ五月ヨリ十月マテ、十一月ヨリ四月

マテヲ各一期トス、金拾五銭ヲ釀出スルモノトス

第十六条 本会ハ有志ノ金銭物品等ヲ寄付スルモノアルトキハ之ヲ受領ス

# 第六章 雜則

第十七条 此規則ハ總集会ニ於テ出席員三分二以上ノ同意ヲ得ルニアラザレハ増減変更スルヲ得ズ

## 附則

# 第七章 連合規約

第十八条 世間本会ト目的ヲ同ウスル團結ニシテ本会ト連合セントスルモノアルトキハ總集会ノ評決ヲ經テ左ノ数条ヲ

結約スルモノトス

第十九条 連合團結ハ相互ニ氣脈ヲ通シ常ニ通信往復スルモノトス

第二十条 懇親會演說會等ヲ開クトキハ連合團結相報シ務メテ協力贊助スルモノトス

第廿一条 連合團結ハ其名簿ヲ交換シ會友ハ交誼ヲ親密ニスルモノトス

明治二十二年六月四日議定

(畢)

史料II 表紙「明治二十三年五月調査現員／會員名簿／大阪月曜會」(本文一八頁、表紙)

C

A

B

## 西区之部

靱中通三丁目

立売堀北通一丁目

西長堀南通三丁目

南堀江三丁目

江戸堀上通二丁目

江戸堀上通一丁目寄留

靱南通五丁目

新町通四丁目

江戸堀南通二丁目

医士

商

医士

代言人

代言人、京都府會議員

会社員

医士

貿易商

伊藤

阪東

法橋

外山

豊岡

奥

渡辺

筒井

加藤武左衛門

末吉

猛

善作

勇雄

進一郎

繁三郎

賢

與一郎

○

◎ n

京町通五丁目	代理人	成道	二郎	○
江戸堀北通一丁目	代理人	窪田	熊太郎	○
靱南通五丁目		山田	善之助	
西長堀北通二丁目	材木商	大和	浦次郎	
立売堀南通五丁目		牧野	清兵衛	
靱南通四丁目	会社員	福井	孝治	○
阿波堀通四丁目	貿易商、府會議員	小泉清左衛門		
西長堀南通四丁目	会社員	寺田	将美	
江戸堀上通一丁目	代言人	阿曾沼	恒齋	
江戸堀上通二丁目	代言人	左近司	六藏	○
西長堀南通三丁目		北村	庄次郎	
江戸堀上通一丁目	代言人、府會議員	渋川	忠二郎	○
江戸堀上通二丁目	代言人、府會議員	森	作太郎	○
本田町通一丁目	煙草商	森本	喜助	

東区之部

北浜四丁目	代言人	伊藤	徳三	○
大手通二丁目	木綿商	伊藤	又三郎	○
本町三丁目	古物商、市會議員	泉	由次郎	○
今橋二丁目	代言人	羽床	修	○
今橋五丁目	齒科医	西村	輔三	○
北渡辺町	古衣商	細井	作兵衛	○
高麗橋三丁目	糸物商、府會議員	豊田	文三郎	
南久太郎町二丁目	売薬商、市會議員	小山	忠兵衛	
唐物町一丁目	工業	岡野	三思郎	
伏見町五丁目	医士	吉岡	卓二	

南新町二丁目	銅石版活版印刷業	横山	栄輔	
北渡辺町	古衣商	俵	友次郎	
今橋二丁目	新聞記者	多田	直勝	○
高麗橋二丁目	写真師	中島	喬木	○
北浜二丁目	洋菓子商	中野	実	○
北浜三丁目寄留		中川	澄	○
北浜五丁目	代言人	中川	淳	○
北浜四丁目	医士	梅田	亀	○
今橋四丁目	代言人、府会副議長	山下	重威	○
南本町一丁目	渋商、市会議員	山口	源兵衛	○
高麗橋一丁目	朝日新聞記者	松本	幹一	○
高麗橋四丁目	洋服商	有本	國三	○
北浜四丁目	代言人、府会議員	菊池	侃二	○
北浜二丁目	代言人	岸本	庄平	○
瓦町四丁目	彫刻業	宮田	銀二郎	○
南久宝寺町三丁目	箔商、市会議員	樋口	重兵衛	○
北区之部				
堂島北町二丁目	代言人、府会議員	石橋	栄太郎	○
堂島中二丁目	新聞記者	石川	淡	
真砂町	新聞記者	林	常直	
壺屋町二丁目	質商、府会議員	細原	清太郎	○
網笠町	代言人	横田	虎彦	○
南森町	会社員	津川	音五郎	○
堂島北町	代言人	梅田	壮二	○
宗是町	会社員、府会議員	山口	幸七	○

◎ h

◎ g

◎ f

b



堂島中二丁目

洋服商

山下 彦太郎

堂島浜通二丁目

米商仲買

二川 鹿之助

中之島五丁目

旅宿業、府會議員

後藤 玉城

堂島浜通二丁目

会社員、府會議員

秋月 清十郎

曾根崎新地三丁目

会社員

廣井 武麿

真砂町

呉服商

森 文七

真砂町

新聞記者

千石 温知

南区之部

順慶町通二丁目

足袋商、市會議員

和田 齋助

順慶町四丁目

足袋商、市會議員

龜岡 德太郎

塩町通二丁目

商、市會議員

竹村 民三

塩町三丁目

米穀商、府會議員

中西 庄三郎

高津町四番丁

米穀商、府會議員

永田 仁助

長堀橋筋二丁目

古物商、市參事會員

安井 健治

心齋橋筋二丁目

書籍商、市會議員

松村 九兵衛

西新瓦屋町

蠟商、府會議員

小森 理吉郎

安堂寺橋筋四丁目

書籍商

青木 恒三郎

塩町二丁目

商

三矢田 長秋

塩町三丁目

商

樋野 広助

西成郡、東成郡、住吉郡之部

新聞記者

西河 通徹

西成郡北野村

農

西島喜代三郎

全 今宮村

農

田口 年信

全 曾根崎村

新聞記者

村松 恒一郎

全 曾根崎村

医士

安川 昌策

○

○

○ ○ ○

◎ j i

全 上福島村 新聞記者

全 歌島村大字加島 農

全 曾根崎村 新聞記者

東成郡天王寺村字天下茶屋 商

全 小路村大字腹見 農、府會議員

島上郡、島下郡、豐島郡、能勢郡之部

島上郡三ヶ牧村大字唐崎 農

全 清水村大字服部 農、府會議員

全 三ヶ牧村大字三島江 農

全 三ヶ牧村大字唐崎 農

全 三ヶ牧村大字全 農

全 三ヶ牧村大字西面 農

全 三ヶ牧村大字唐崎 農

島下郡吹田村 農、府會議員

全 清溪村大字高山 農

全 新田村大字上新田 農、府會議員

豐島郡池田町 農

全 全町 商

全 全町 商、村會議員

全 豐中村大字桜塚 農、会社員

全 豐津村大字垂水 農

全 豐中村大字岡町 商

全 庄内村大字菰江 農

全 熊野田村 農、村長

森本 駿

鈴木 菊太郎

末広 重恭

綿谷 龜之助

荻 清右衛門

浜 時三郎

織 了意

奥田權右衛門

久保田 重平

久保田 良吉

木村孫右衛門

三宅 万能雄

西尾與右衛門

西野 啓造

中野 広太郎

飯島 秀詮

稻束芝馬太郎

井沢 季太郎

伊藤 莊一

伊関 喜兵衛

家原 小三郎

畑 信政

鳩野 正誼

負田 七平

○ c

○ d

○

◎ l

◎ k

◎

全	池田町	農
全	南豊島村大字上津島	農、村長
全	豊中村大字桜塚	農、村長
全	池田町	商
全	豊中村大字山之上	農
全	細河村大字止々呂美	農
全	全	農
全	池田町	商
全	熊野田村	農
全	全	農
全	全	農
全	池田町	農
全	全	商、村会議員
全	豊津村大字垂水	医士、府会議員
全	豊中村大字岡町	医士
全	池田町	商
全	全	農
全	全	商、村会議員
全	豊中村大字新免	医士
全	村大字原田	農
全	桜井谷村大字内田	農、村会議員
全	池田町	商
全	全	商
全	全	商
全	全	商

大木	清次郎
小畑	万次郎
奥野	熊一郎
岡崎	経充
渡辺	安太郎
川上	幾近
川上	茂
横田	徳蔵
田中	利平
田中	由松
田中	静軒
丹上	宗次郎
武田	芳松
垂水	熊次郎
田中	桂次
中井	利吉
中村	孫四郎
永田	定次郎
永井	李太郎
永田	淳二郎
中川	宗太郎
長尾半左衛門	
村竹	庫三郎
植村	行順
入江	亀太郎

○

◎  
m

◎

◎

◎

◎

全 細河村大字古江	全 池田町	全 熊野田村	全 全 町	全 池田町	全 池田町	全 熊野田村	全 細河村大字東山	全 萱野村大字坊之島	全 池田町	全 熊野田村	全 桜井谷村大字南刀根山	全 池田町	全 豐津村大字垂水	全 南豐島村大字長興寺	全 熊野田村	全 全 町	全 池田町	全 熊野田村	全 小曾根村大字小曾根	全 小曾根村大字小曾根	全 全 町	全 全 町	全 全 町	
聯合村會議員	農	農	商、村會議員	商	農	農	農、村長	農、村長	商	農	農、村會議員	農、村長	農	農、村長	農	商、村會議員	農	農、助役	村長	村長	村長	村長	村長	村長

森 秀次	久富 矩道	東江 朝次郎	久保 太兵衛	芝 信五郎	清水 藤助	正路 小平次	南 佐平	坂本林右衛門	佐野 守為	笹部嘉左衛門	淺井 甚兵衛	豐嶋 禄平	榎野 信次郎	紅山 孝七	小寺 秀松	福田 熊吉	福井 兵吉	深田 壽松	深田 與平次	丸川 真次郎	松本 節斎	山岡 伊三郎	山本 清吉	倉田 豐次郎
------	-------	--------	--------	-------	-------	--------	------	--------	-------	--------	--------	-------	--------	-------	-------	-------	-------	-------	--------	--------	-------	--------	-------	--------

○

◎

◎  
○

◎ ◎

◎

◎  
p

◎

全	中	豐島村大字服部	農、村長
全	豐中	村大字新免	農、助役
全	庄内	村大字牛立	農
全	豐中	村大字桜塚	農
全	池田	町	商
全	榎坂	村	農
能勢郡	東郷	村大字野間	農、助役
全	枳根	莊村大字神山	農
全	全	村大字今宮	農
全	歌垣	村大字倉垣	農
全	東郷	村大字野間	農、村長
全	枳根	莊村大字長谷	農、助役
全	枳根	莊村大字今西	農
全	西郷	村大字宿野	農
全	全	村大字片山	農
全	全	村大字宿野	農、村長
全	全	村大字大里	農、助役
全	東郷	村大字野間大原	農
全	全	村大字全	農、村會議員
全	全	村大字地黃	農
全	枳根	莊村大字稻地	農
全	全	村大字全	農
全	西郷	村大字宿野	農
全	田尻	村大字下田尻	農、村長
全	東郷	村大字地黃	農

森	伊太郎
村上	忠造
辻	源之助
宮本	善吉
鈴木	源兵衛
鈴木	右吉
岩田	泰市
池田	源十郎
速水	良平
西山	繁外
大原	與実
大植	佐次郎
大石	源太郎
小山	定次郎
吉村	藤一郎
田口	鹿之助
多田	藤太郎
谷	喬
谷	三右衛門
榎木	安積
植村	重左衛門
植村	要蔵
野木	繼三郎
能多	卓爾
前田	正義

○

◎

全	枳根莊村大字稻地	農	松村 芳助
全	全 村大字年野	農	藤井 長太郎
全	東郷村大字地黃	農	古嶋 與実
全	全 村大字全	農	阪部 彦太郎
全	全 村大字全	農、村會議員	阪部 久兵衛
全	全 村大字全	農、村長	木戸 次善
全	枳根莊村大字稻地	医士	満井 見 益
全	西郷村大字片山	農	水越 栄太郎
全	田尻村大字上田尻	農、村會議員	三浦 一之
全	西郷村大字大里	農、府會議員	寺倉 隼之助
全	全 村大字片山	農	水越 定右衛門
全	枳根莊村大字垂水	農	中西 隼之助
全	全 村大字山辺	医、村長	森本 玄良
全	全 村大字垂水	農	森村 虎太郎
全	全 村大字全	農	森村 栄蔵
全	全 東郷村大字地黃	農	清水 栄之助
全	全 村大字野間中	農	平田 義之
河内茨田郡、交野郡、讚良郡、河内郡、若江郡、			高安郡之部
茨田郡九ヶ庄村大字神田	雑誌社員	橋本 吉太郎	
全 友呂岐村大字石津	農	西村 清太郎	
全 關村	農	大西 壽範	
全 四宮村大字下馬伏	農	植村 勘次郎	
全 三郷村大字東橋波	農、府會議員	葭崎 櫛二	
全 友呂岐村大字郡	農	中井 周蔵	
全 四宮村大字上馬伏	農	藤井 健次郎	

○

○  
e

交野郡牧野村大字小倉	農、府會議員	小山 彦三郎	○
全 交野村大字私部	農	北田 膳造	
全 津田村大字津田	農	三宅 幸四郎	
讚良郡甲可村大字岡山	農、府會議員	高橋 甚八	○
全 寢屋川村大字堀溝	農	田中 元吉	
全 四条村大字深野南	農	植村 吉太郎	
全 寢屋川村	農	前田 欣次郎	
河内郡木戸村大字芝	農、府會議員	岩崎 安次郎	○
全 池島村	農	高岡 弥太郎	
若江郡八尾村大字八尾	農	石田 貞吉	
全 楠根村大字長田	農、府會議員	二階堂 弥太郎	○
全 意岐部村	農、助役	武中 市太郎	
全 全 村大字御厨	農、府會議員	植田 重太郎	○
全 全 村大字八尾	農	上嶋 友二郎	
全 全 村大字全	農	安尾 善三郎	
全 全 村大字全	印刷業	平井 源兵衛	
石川郡、八上郡、古市郡、安宿郡、錦部郡、丹南郡、志紀郡、丹北郡、大縣郡、淡川郡之部			
石川郡赤坂村大字森屋	農	武部 三郎	
全 石川村大字大ヶ塚	農、府會議員	梅川 辰次郎	○
全 富田林村大字富田林	商	青谷 亀次	
全 喜志村大字喜志	商	木下 直次	
古市郡古市村大字菅田	農、府會議員	矢野 佐太郎	○
錦部郡長野村大字長野	農、府會議員	西條 與三郎	○
丹南郡狭山村大字半田	農、府會議員	溝端 佐太郎	○
志紀郡柏原村大字柏原		花形 恒義	

全	道明寺村大字道明寺	医	上田 逸郎
全	全 村大字舟橋	農	松永 森太郎
全	柏原村大字市村新田	商	高田 清三郎
全	志紀村大字弓削	農	清水 政太郎
全	澤田村大字林	農、府會議員	東尾 平太郎
丹北郡瓜破村大字東瓜破	農、府會議員	全田 俊太郎	○ ○
大県郡大県村大字大県	農、府會議員	植田 弥一	○
全 堅下村大字平野	農、府會議員	山莊 逸昨	○
全 全 村大字全	医、府會議員	林 新八郎	○
全 全 村大字全	和泉堺市、大鳥郡、泉郡之郡	長崎司馬太郎	○
堺市寺地町西四丁	酒商、府會議員	指吸 千太郎	○
全 桜ノ町東一丁	煉化製造業、市會議員	伊藤 元三郎	○
全 大浜通一丁目	壳葉業、常設教育委員	原口 仲太郎	○
全 新在家町東二丁	農、市参事會員	錦池千鶴之助	○
全 少林寺町東ノ丁	画商、府會議員	赤澤 幸次郎	○
全 東ノ町東四丁	会社員、市會議員	北田 豊三郎	○
全 柳ノ町西二丁	農、府會議員	喜多羅守三郎	○
大鳥郡神石村大字市	農	和田 嘉十郎	○
全 西陶器村大字源取	農	角谷 勝太郎	○
全 神石村大字踞阪	農	吉村 奎三郎	○
全 八田庄村大字八田寺町	農	辻 安太郎	○
全 東百鳥村大字土師	農	小林 梅司	○
全 片倉村	農	木寺 重太郎	○
全 向井村大字中筋	農、府會議員	南 英三郎	○

◎



泉郡大津村大字宇多大津 農、府會議員  
全 伯太村大字伯太 農、府會議員  
○ ○

日根郡、南郡之部

日根郡西鳥取村大字波有手

農 石津 信太郎

全 小谷村

農 原 勝造 ○

全 雄信達村大字男里

農、村長 谷 朝宗 ○

全 下莊村大字箱作

農、村長 山中 静一 ○

全 尾崎村

農、村長 松井 謹輔 ○

全 北中通大字中庄

農 里井 元次郎 ○

全 長瀧村

農 喜多 久下 ○

全 樽井村

商 城野 文十郎 ○

全 全 村

商 城野 久七郎 ○

全 南郡岸和田村

銀行員 川井 為己 ○

全 全 村

銀行員、府會議員 佐々木 政父 ○

客員之部

播摩國加東郡龍野

農

全 飾東郡飾万町ノ内田町

田中 久三郎  
有本 丈太郎

【別記】

河内國渋川郡竜華村大字植松

農 石井 與四郎

全 志紀郡三木本村大字木本

農 福中 眞三郎

摂津國西成郡天王寺村大字天下茶屋

農 藤田 廣吉

全 豊島郡池田町

酒造業 八尾 傳吉

大阪市西区新町南通四丁目

貿易商 福田 友七

【裏表紙】

明治二十三年五月十日印刷／大阪市東区本町三丁目良栄社

◎

注

(1) 原文復刻が原則だが、繁雑なので、以下の点のみ原文を省略している。

各区の中で、地名の前にすべて「西区」や「全」が付さ  
れているが、省略。

文字の変更、壹↓一、貳↓二。

(2) a は、名簿 A では「摂津國西成郡曾根崎村」が住所。

(3) b は、名簿 A では「新聞記者」となっている。

(4) c は、名簿 A では「大阪市東区今橋一丁目」が住所。

(5) d は、名簿 A では「與左右衛門」となっている。

(6) e は、名簿 A では「摂津國西成郡曾根崎村寄留 農」  
となっている。

(7) f は、名簿 B では、「大阪市北区中之島二丁目」が住

所。

(8) g は、名簿 B では、「関西日報社内」が住所。

(9) h は、名簿 B では、「関西日報社内」が住所。

(10) i は、名簿 B では、「関西日報社内」が住所で、職業  
は「画工」。

は「画工」。

(11) j は、名簿 B では、「関西日報社内」が住所。

(12) k は、名簿 B では、「関西日報社内」が住所。

(13) l は、名簿 B では、「関西日報社内」が住所。

(14) m は、名簿 B では、「植田行順」。

(15) n は、名簿 B では、「関西日報社内」が住所。

(16) o は、名簿 B では、「豊田禄平」。

(17) p は、名簿 B では、「山田伊三郎」。